

日本文化研究所・研究開発推進機構と私

遠藤 潤

私は、この4月に研究開発推進機構から神道文化学部へ異動になり、学部での研究・教育を主たる仕事とすることとなりました。この機会に「日本文化研究所」との関わりについて何か文章を記すようにというお話を機構長・研究所長である井上先生からいただきました。二種の「日本文化研究所」、すなわち、研究開発推進機構の前身である日本文化研究所、また、現在研究開発推進機構内に機関として設置されている日本文化研究所の二つに関わってきた者として、きわめて個人的な思い出しか書くことはできませんが、ここに一文を記します。

私が旧制度下の日本文化研究所の兼任講師となったのは1995（平成7）年4月である。井上先生からお声をかけていただいたことであつた。それ以前、『神道事典』のいくつかの項目を執筆させていただき、また井上先生が開いていた神仏関係研究会に出席させていただいていたが、まさか研究所に呼んでいただけたとは思っていなかったため、とても驚いた記憶がある。

当時の國學院大學は渋谷再開発の前で、若木エリアには鉄筋コンクリートの校舎や旧図書館が並び、神殿前には噴水があつたがすでに水が出ることはなかったかと思う。若木エリアで、当時の建物で現在でも残っているのは神殿と百周年記念館のみである。

常磐松エリアには何棟かの建物が立ち、その中でも最も高い建物は6階建の常磐松2号館で、その6階のフロア全体が日本文化研究所であつた。

その頃の研究所では専任の先生を含めて、複数の人で一つの研究室を使用することとなっており、私は入所初年は井上先生の部屋であつた第4研究室で、翌年から第3研究室で机と棚を使用させていただけることとなつた。

入所の直前まで大学院生だった自分にとって、研究機関で棚と机を使用できるというのはとてもうれしかった。また、仕事時間の大半は、共同スペースであるセミナー室の一部に設けられていたPCのスペースで過ごしていた。ここでは別の研究室の人たちと顔をあわせる機会も多く、先生方や先輩若手研究者からの耳学問はとても楽しかった。

担当したプロジェクトは「神道人物総覧の編集・刊行」で、やがて刊行物の名称は『神道関係人物研究文献目録』と決定されて、その編集・刊行のプロジェクトとなつた。

このプロジェクトでは、自分は阪本先生とともに国学関係の人物を担当するとともに、全体の連絡係となつた。阪本先生のもとで国学者について調べ記事を書くというのは、自分にとって身の丈を大きく越えた仕事であつたが、日本文化研究所がすでに刊行していた『和学者総覧』や先行の辞事典の記事から出発して、自分の力の及ぶ限り論文を捜索するなどして、何とか記事を書いた。この文献目録に収められた国学関係者は、おおよそ200人程度であつたかと思う。記事の内容は、基本的に研究文献の目録が中心で、人物の略歴の紹介はわずか数行だったが、この数行のためにいろいろと苦労した。生没年月日が典拠によって異なっていたり、そもそも先行の文

献に典拠が示されていなかったりして、そうした基礎事実を確認するのに、予想以上の時間と手間がかかった。とはいえ、最初のうちは比較的時間の余裕があったので、こういう作業も楽しく、もしかすると自分にはこうした地味なことが合っていたのかもしれない。この作業の中で、人物の生没年月日など基本的な事実はできるだけ正確にすべきこと、また、論文でいろいろな事柄を記すときに典拠は明確にしておくことが大切だと思い知り、後から調べる人のためにも、自分の行動規範とすべきだと考えるようになった。学位論文をもとに2008年に刊行した拙著『平田国学と近世社会』には典拠を示した年表を付してあるが、それはこのような日本文化研究所の研究プロジェクトで学んだことを、自分なりに試行してみたものである。

このような作業に役立ったのは、日本文化研究所のプロジェクトのために集められた本のつまった研究所の図書室であり、ここはかけだしのポストドクであった自分には本当に勉強になった。神道・国学や宗教に関して基本的に何を読んでおかなければならないのか、図書室の本のラインナップは、無言のうちにその内容を示していた。それほど大きな図書室ではなかったが、神道・国学や宗教の研究をするために頻繁に使う必読文献は揃えられていて、出入りして棚を見ているうちに学んだことは大きかった。

2000年の『神道関係人物研究文献目録』のプロジェクト終了とともに、私は日本文化研究所を退かせていただくこととなった。博士論文の執筆など、自分の研究に集中する期間を作ろうと考えたためでもある。

ところが、2002年秋のCOEプログラム採択とともに、井上先生からお声をかけていただき、再び日本文化研究所での仕事に従事できることとなった。2003年春から日本文化研究所の助手として、COEプログラムおよび研究所のプロジェクトに参加することと

なった。COEプログラムのうち、井上先生をグループリーダーとする第3グループでは、神道・日本文化国際シンポジウムの実施や神道事典の英訳などが行われた。このうち、『神道事典』の英訳では、平藤さんとともに私は訳者からの質問に答える担当となった。この仕事は今から振り返っても強い印象を残している。

『神道事典』の英訳には世界各地の英語話者が参加していたが、インターネットによる一種の掲示板システムが採用されて、訳者が翻訳する際に生じた疑問はこの掲示板に投稿され、それに対して平藤さんや私など日本人スタッフが質問に答える形態をとっていた。また、研究所にもヘイヴンズ先生や非常勤のネイティブの翻訳スタッフがおり、こうした人たちからの質問にも日本人スタッフが答える体制となっていた。

海外から掲示板を通じて送られる質問は、各地の時差もあって、ときには千本ノックさながらのものとなった。日本の夜中はある地域ではまったくの作業時間で、朝、研究所に出勤してみると、掲示板に質問や意見がどっさりたまっているという日も少なくなかった。「世界各地から24時間まんべんなく質問が寄せられる」というのはあまりの誇張であるが、しかし、気分としてはそんなふうに感じる局面もあった。ただ、どんな質問でも答えなければならないという意味で、神道の基礎知識に関するジェネラリストを志向せねばならず、また英訳の場面で初めて明らかになるさまざまな論点があり、神道について広く勉強するまたとない機会となった。

機構内の研究機関としての日本文化研究所では、国際交流・学術情報発信部門と神道・国学研究部門の2部門が立てられ、私は主として神道・国学研究部門の研究事業に従事することとなった。また、伝統文化リサーチセンターでは、皇典講究所・國學院の学術資産に関する研究事業に参加することとなり、大

学院時代に東大の史料調査で接していた宮地直一に、今度は國學院所蔵の史料調査を通じて「再会」することとなった。

機構発足前後は、建物としては、常磐松エリアの本格的再開発の時期でもあった。学術メディアセンターの建設のために常磐松2号館が取り壊されることになって、(旧)日本文化研究所は、若木エリアにまだ部分的に残されていた本館の4階に移った。本館の4階の部屋は、もとは大教室がいくつかあったところで、渋谷再開発に伴う移動のなかで、大教室を改装してスポーツ身体関係の先生方が研究室として使っており、さらにその後日本文化研究所が入ったのであった。学術メディアセンター完成までの過渡的な措置であり、各研究室は大教室を本棚で区切っただけといういかにも仮設的なたたずまいであったが、自分には何だか好ましい不思議な浮遊感を感じさせるものでもあった。常磐松2号館から他の部署も含めて一斉に退去したときには、各フロアにいろいろなものが残されていて、当時の研究所の何人かで各階を回って、電源タップやスタンドなど使える備品をかき集め、それらがこの本館時代の設備のそれなりの部分を支えた。

ここの冷房はフロア全体を一括で冷やす大掛かりなもので、冷房好きの某同僚と冷房嫌いの私との間では、夏のあいだずっと、冷房温度をめぐる熾烈な戦いが繰り返されていた。私が朝高めに温度を設定すると、彼がいつの間にか温度をひどく下げ、また私が彼のすきをみて温度を上げる、限りない応酬がくり返されていたのである。『日本文化研究所五十年誌』は、そのような環境のもとで編集された。

COE終了後の2007年4月、それまでの日本文化研究所は研究開発推進機構に改組転換され、この機構には、共同利用機関として、研究開発推進センター、学術資料館(現・学

術資料センター)、校史・学術資産研究センターとともに、日本文化研究所という名称を継承した研究機関が設置された。また、研究開発推進機構には、「國學院大學21世紀研究教育計画」の具体的事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」を推進するために、伝統文化リサーチセンターが設置され、この事業は平成19年度の文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定された。

学術メディアセンターが完成し、研究開発推進機構の各機関がこの場所に移ってからは、おおよそ現在のような環境となった。最新の建物のなかに教員の研究室や共同研究室が置かれることとなり、本館4階からの環境の変化の大きさには戸惑ったが、やがて充実した図書館の上に「棲んでいる」ことのありがたさを噛みしめることとなった。研究開発推進機構は多くの機関からなり、(旧)日本文化研究所と比べると、その規模は人数の面でも大きくなった。

組織や施設、人員などが充実した研究開発推進機構では、平成24年3月にはオープン・リサーチ・センター整備事業の事業期間も終了し、現在また変化のときを迎えているように思える。機構や日本文化研究所が今後どのような組織になっていくのか私が云々すべきことではないが、自分がこれまで体験してきたことからささやかな希望を申し上げれば、研究開発推進機構や日本文化研究所は、これからも若手研究者が自分の大学院では経験できないことを経験できる場であってほしいと思う。規模の大きい研究プロジェクトへの参加、専門が異なる先生方や若手研究者との出会いなど、ふつうにはなかなか得られないものがここにはある。これまでこのような環境を作り上げ育ててこられた先輩の先生方に心から感謝するとともに、今後もそのような場が國學院に存在しつづけるよう、自分も微力ながらつとめたいと考えている。